



【写真左】大井海軍航空隊航空写真(昭和17年ごろ)
*上空5,000mから撮影

〈写真提供〉元海軍大尉 嵯峨 武氏(空写会会長)
*牧之原コミュニティセンター所蔵

「写真中央の黒い部分を航空母艦に見立てて、着艦訓練を行っていた」という



【写真右】現在の様子(平成22年9月撮影)

↑至富士山静岡空港
↓至東名高速道路相良・牧之原インター

茶畑が飛行場に
牧之原台地に大日本帝国海軍(旧日本海軍)の飛行場建設が計画されたのは、今から約70年前のこと。昭和14年、第四次海軍軍備充実計画により、海軍航空隊を14隊から75隊に増やすことを決定し、牧之原の地も候補地の一つとして挙げられた。

昭和15年3月26日、牧之原尋常小学校(当時)に、飛行場予定地の小笠原六郷村、河城村(菊川市)、萩間村、勝間田村(牧之原市)の村長と地主、農民ら約260人が集められ、海軍横須賀司令部大佐から「海軍航空隊の基地を作るので、軍用地として約三百町歩(300ha)を買い上げる。軍用地内の農家は立ち退くこと」と一方的に通告された。(同校も対象になり、現在の場所に移転)。同時に、滑走路から周辺400m内の建物撤去なども指示された。

当時、計画地は明治初めに旧幕府の武士などが入植し苦勞して開墾した茶園が広がり、住民らは飛行場の建設に反対。後日、農民約100人が県知事に中止を訴えたが、軍の計画はそのまま実行され、建設予定地内の立ち退き

数は約200戸にも及んだ。

大井航空隊の3年
17年4月1日、長さ1500m、幅80mの滑走路とともに海軍第13連合航空隊「大井海軍航空隊」が開隊。予科練習生(飛行する予備知識を学ぶ訓練生)などの飛行訓練、通信訓練、偵察要員を育成する目的の練習航空隊だった。

飛行科、整備科、工作科、会計科、主計科、内務科、運用科、通信科などから組織され、多い時には2500人から3000人の隊員がいた。

飛行機は当初、九〇式機上作業練習機が主に使用され、昭和19年12月ごろからは、機上作業練習機「白菊」が主力機となった。

昭和20年に入り、戦局が著しく悪化。海軍の戦力が大幅に減少したことなどから2月には飛行訓練が中止され、ついに3月、特攻(機体に爆弾を積み、操縦者が自爆前提で目標に体当たりする特別攻撃)の命令が下り、飛行機の多くが特攻隊に編入され、神風特別攻撃隊「八洲隊」が組織された。その後、特攻隊員は部隊編入され、沖縄決戦に備えて各地の基地に向かって

いった。

白菊には、爆弾が装備され、教官など選抜された隊員により特攻訓練が開始。当初昼間に行われていた訓練も途中から、夕方や夜間に行われた。7月28日ごろ、同隊は米軍の飛行機であるグラマンの波状攻撃により、司令部や倉庫、格納庫などが被害を受け、隊員の対空射撃により、一機を撃墜したという記録が残っている。

そして、8月15日の終戦により武装解除し、同隊も解散。約3000人いた人々もいつの間にか数百人しか残っていない。

当時の面影は今も
戦後昭和22年ごろから、基地のコンクリートは剥がされ、牧之原台地に元の茶畑が再び姿を現した。

同隊は僅か3年という期間でその役目を終えたが、戦後68年が経過した現在でも隊門の一部やレンガ積み壁、防空壕の跡などが残り、当時の様子などを今に伝えている。



牧之原コミュニティセンターに展示されている白菊のエンジン



大井海軍航空隊で使用されていたものと同型の練習機「白菊」

次世代に響く鐘の音

大井海軍航空隊

全国有数の大茶園が広がる牧之原台地。約70年前、ここに旧日本海軍の飛行場があったことを知っていますか。
—大井海軍航空隊—

昭和20年8月15日の終戦から68年が経過し、戦争体験者は年々減少。親から子、子から孫へ、さらには地域へ、戦争を語り継ぐ人や機会も減ってきています。

大井海軍航空隊の歴史や当時を振り返り、戦争の悲惨さと平和の尊さについて考えます。

戦争を知らない私たちが、いつまでも次の世代に大切に伝えていけるように。